

Title	ジャーナリズムと社会的意味：「リアリティ」の社会学の視座から
Sub Title	Journalism and social meaning : a study in the social construction of reality
Author	烏谷, 昌幸(Karasudani, Masayuki)
Publisher	慶應義塾大学法学研究会
Publication year	2017
Jtitle	法學研究 : 法律・政治・社会 (Journal of law, politics, and sociology). Vol.90, No.1 (2017. 1) ,p.49- 73
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	有末賢教授退職記念号
Genre	Journal Article
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00224504-20170128-0049">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00224504-20170128-0049</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

# ジャーナリズムと社会的意味

——「リアリテイ」の社会学の視座から——

鳥谷昌幸

第1節 「リアリテイ」とは何か？

第2節 マス・コミュニケーション論、政治コミュニケーションにおける「リアリテイ」論

第3節 「リアリテイ」論への批判的再構成

第4節 テクスト密着型のジャーナリズム研究に向けて

## 第1節 「リアリテイ」とは何か？

本稿の目的は「ジャーナリズムと社会的意味」研究の理論的視座を獲得するべく、マス・コミュニケーション論、政治コミュニケーション論において発展を遂げてきたメディア・フレーム論を換骨奪胎し、「リアリテイ」の構成・構築に関する社会学的研究へと展開するための論理的道筋を探ることにある。

この主題に関して筆者は既に何本かの論文を執筆し、メディア・フレーム論の批判的レビューを何度か行つて

いるので(鳥谷二〇一四、二〇一六)、ここではメディア・フレーム論の社会学的展開にとって「リアリティ」の社会学への理解を深めることが有意義であるという論点に集中することにしたい。

まずは「リアリティ」概念の基本的な要点を確認するところから始めることにしよう。

Reality とは「言葉には〈主観〉と〈客観〉あるいは〈意識〉と〈実在〉という決して容易に折り合わない問題系が埋め込まれているため、この言葉を不用意に用いようとするとたちどころに哲学的迷宮の中に迷い込んでしまう。本研究の限定された目的にとつては、人間の意識が任意の対象を何らかの意味として経験することに関わる概念であると定義するところから出発すれば十分であろう。<sup>(1)</sup>つまり「リアリティ」について考えるとは、対象の意味の自明性を疑うこと、もつと厳密に言えば、対象の自明性を構成された意味という地平に乘せることによつて疑うことを意図する概念として把握することがもつとも有益である。

ジャーナリズム論にとつて「リアリティ」の概念こそが理論的に重要な概念であるという場合、それは観察対象の自明性を疑うというあらゆる学問研究にとつてももつとも基本的で重要な作業が、本研究においては「意味」問題として遂行されるということだ。<sup>(2)</sup>

第二に、これと並んで重要なことは、長い哲学史的背景を持つこの概念を、社会学者たちが経験的に観察可能な領域に移し変えて社会的に研究するための道筋をつくってきたことである。シュッツがフッサールの現象学を用いてウェーバーの理解社会学を徹底的に吟味し、社会学の哲学的基礎付けの作業を試みたことは本研究にとつても極めて重大な意義を持つものであったことはいままでもない。シュッツが『社会的世界の意味構成』において示したあの執念の理論的探求の足取りを辿ることは「ジャーナリズムと社会的意味」の研究に関わる者にとつても必須の課題である。

だが、本研究にとつてのより直接的恩恵は、こうした社会学の哲学的基礎付けそのものではなく、シュッツの

切り拓いた地平の上に、後続の研究者たちが、社会的な記述の中に、哲学的な主題を変奏して織り込む文体を開発し旺盛に利用するようになったことにある。

シュッツの現象学的社会学を発展的に継承したバーガーとルックマンは、「リアリテイ」の構成という主題を哲学の領域から意識的に切り離すことを選択し、「リアリテイ」は社会的に構築される<sup>(3)</sup>という有名な命題を打ち出した。つまり、この主題を哲学的領域から取り出して、より経験的な社会学的課題として再定義し、ここに社会学が新たに取り組むべき中心の主題を見出したのである。

とはいえ、ここに新たに設定された課題は、徹頭徹尾経験的な観察のみによって明らかにされるといふ類の問題でなかったこともいまとなつては明らかである。バーガーとルックマンはシュッツが専念した社会学の哲学的基礎付けという課題からは明確に手を切ったが、伝統的な哲学の主題を全て否定しようとしたわけではなかった。彼らがやろうとしたのは、経験的な社会学の思考領域の中に伝統的な哲学の主題を静かに導き入れ、社会学者としてのアイデンティティのもとに彼らなりの「哲学的探求」を行おうとしたのだと考えられる<sup>(4)</sup>。

こうした哲学的探求という意欲を大なり小なり持ち合わせ、「リアリテイ」の社会的構築の課題に取り組みはじめた社会学者を構築主義と呼ぶようになってきたことはよく知られている<sup>(6)</sup>。しかしコミュニケーション論の領域において「構築主義」な発想が広く支持されるようになるに及んで、「構築主義」という看板を掲げることがかえって多様な研究の内実の差異を分かりにくくしていることも事実である。

本研究が高く評価するリアリテイの社会学の諸研究の多くに共通するのは、主観主義的社会学と客観主義的社会学それぞれの問題系を上手く組み合わせながら新しい問いの地平を切り拓くことで、経験的な社会学の記述の可能性を大きく拡大させたという点である。

例えば、神の〈実在〉は物理的に確かなものではないにも関わらず、なぜ時として人々にとつて神の存在が

「リアル」なものとなり得るのか? という宗教的信仰に関する社会学的問いはその巧みな例のひとつである( Berger 1973)。また人種は厳密にいつて生物学的根拠(実体的根拠)を持たないにもかかわらず、なぜ人々にとって社会的に「リアル」なものであり続けるのか? という人種社会学における問いも同様である(竹沢編二〇〇九)。こうした成功例は、ジェンダー論や社会問題の社会学にもみられる。いずれのケースも〈主観〉と〈客観〉の問題系を組み合わせることによって経験的な記述がそのまま「哲学的探求」の文脈で意義を持ち得る新たな社会学的問いの地平を切り拓くことに成功している。

## 第2節 マス・コミュニケーション論、政治コミュニケーション論における

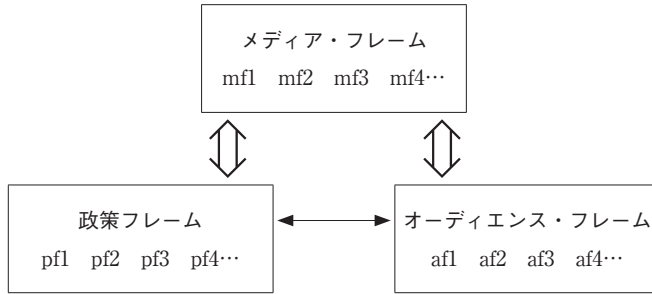
### 「リアリティ」論

「リアリティ」の社会学の研究成果が、マス・コミュニケーション論における〈脱効果研究〉という大きな理論的潮流を支えた重要な理論のひとつであったことはよく知られている。

〈脱効果研究〉の知的運動をつくりだしたもつとも大きな力が、西欧を震源地として展開したカルチュラル・スタディーズ(CS)であったことは改めていうまでもない。その知的変革の力は現在に至るまで精神的な成果を生み出し続け、結果的にマス・コミュニケーション研究内部の「批判学派」という位置から突き抜けて、いまや〈メディア・スタディーズ〉<sup>(7)</sup>という新たな研究分野として分離独立を果たすことになったと評価できる。その知的変革の意義については多くの研究が語っているのでここで改めて繰り返す必要はないだろう。

確認しておくべきは、この〈脱効果研究〉の大きな流れがCSのみによるものではなく、「リアリティ」の社会学もまた、「二方向的な情報の流れ」という効果研究のパラダイムが依拠する既存のマス・コミュニケーション

図 政策フレーム、メディア・フレーム、オーディエンス・フレームの相互作用としての集会的コミュニケーション過程



ン観を刷新し、オルタナティブなマス・コミュニケーションのプロセスモデルを提供することに貢献したという事実だ。

中でもアドーニとメインが既存のマス・コミュニケーション研究、メディア社会学の主要な成果を「リアリティ」論の文脈において包括的に再把握できることを示した点は興味深い (Adoni & Mane 1984)。彼らは社会的リアリティの主観的次元、客観的次元、象徴的次元を既存研究がどのように考え、それぞれの次元をどのように理論や仮説の中に位置付けたかを比較・分類することで、マス・コミュニケーション論、メディア社会学の理論的な統合をはかることができると考えた。

彼らの提示したアイデアは必ずしもフレーム論の文脈に應用されてきたわけではないが、少なくとも彼らの議論をマス・コミュニケーション論、政治コミュニケーション論の重要な知的共有財産とみなし得るという判断に立つ (例えば大石 一九九八、二〇〇五) のであれば、上の図に示されるような考え方はさほど珍しいものとはいえないであろう。

これはマス・コミュニケーション、政治コミュニケーションの過程を、政策過程、報道過程、世論過程の三領域に区分し、それぞれの領域に多様なフレームがせめぎ合っている状況を示している。この場合のフレームは争点についての「考え方」を指している。またここでいう「考え方」は単に「意見」のみを指すというよりも、ある争点に関する意見のもっともら

しきや本当らしきを支えている意味の地平を含むもの、つまり「リアリティ」の問題を組み込んだ表現として理解していただきたい。

マス・コミュニケーション過程とは、このそれぞれの領域におけるフレームが互いに結びつき支え合う関係をつくりながら任意のフレームの強度を高めていくプロセスとして把握されることになる。政策↓報道↓世論という一方向へと影響が伝達されるという効果研究の発想ではなく、むしろある争点に関して競合的な関係にある複数のフレームが互いに争うプロセスとして把握される。

このような形でマス・コミュニケーション論、政治コミュニケーション論の過程を把握する試みが必ずしも研究者の中で通説として扱われてきたわけではないにせよ、これまでの先行研究が生み出した有力説として尊重することは妥当な判断だといってよい。そしてフレーム概念とは、「リアリティ」の構成、構築について経験的な「意味」の分析として遂行する方法であるとみなされてきたものである。

特に報道の領域における「メディア・リアリティ」の経験的分析の成果をこの集合的コミュニケーション過程の他の分析的成果とリンクさせることに貢献してきたのが社会学的なメディア・フレーム論であった。ゲイ・タックマンの「ニュースのフレーム」(Tuchman 1978)、トッド・ギトリンの「メディア・フレーム」(Gitlin 1980)の概念はその先駆的な業績である。またこれら先行研究を洗練させていったのがウイリアム・ギャムソンの一連の研究であった(例えば Gansson 1985, 1988, 1989)。ギャムソンはフレーム分析の調査方法を開発し、洗練させていくと同時に、先の図と同じものを提示したわけではないが、メディアと世論を相互作用システムとして把握し、メディア・フレームとオーディエンス・フレームの相互作用のプロセスを分析する研究を行い、これらを構築主義的な社会理論によって説得的に論じたのである。

「ジャーナリズムと社会的意味」は以上のようなマス・コミュニケーション過程、政治コミュニケーション過

程についての着想を理論的前提としながら研究を進めていくべきである。つまり「メディア・リアリティ」の分析を機軸としながら、争点や社会問題についてのある考え方が政策、報道、世論の相互作用を通じて自明性を獲得し、「常識」の地位を獲得していくプロセスに照準を絞るといのが本研究の基本方針である。そのためには、「メディア・リアリティ」、つまり新聞やテレビ映像の中で描かれているものの自明性を構成された「意味」として分析するための視角が必要になる。

では、そのアイデアをどこから調達することができるだろうか？ われわれはメディア・スタディーズの研究成果や批判的言説分析などから多くを学ぶことができるし、ジャーナリズム論はこうしたメディア、言語、記号について徹底した考察を進めてきた一連の研究成果から多くの重要な基礎概念を借用する必要がある。しかし肝心のメディア・フレーム論についてはギャムソンが多くの研究成果を出した一九八〇年代後半から、「リアリティ」の社会学の視座との結びつきを少しづつ失っていったというのが実態である。

この点については別稿（鳥谷二〇一六）で論じたことなので省略するが、一九九〇年代以降のメディア・フレーム論の研究動向に関する限り、効果研究が最大勢力を占めるようになっていくフレーム・スタディーズにあつて、「メディア・リアリティ」を分析するという問題意識そのものが後景に退いていくことになった。本稿に課せられた重要なミッションは、この失われた結びつきを取り戻すことにある。

### 第3節 「リアリティ」論への批判的再構成

#### 1 コミュニケーションはいかにして可能か？

失われた「リアリティ」論との結びつきを取り戻すためにも、一度、フレームという概念の初心に立ち戻ると



ころから再出発する必要があるだろう。

グレゴリー・ベイトソンがいち早くフレームの概念を用いて取り組んだことは、論理学の問題をコミュニケーション論の問題として読み換える試みであった。<sup>(8)(9)</sup> ベイトソンは、人がしばしばクラスとメンバーの混同、すなわち抽象性の次元を取り違えて物事を考えていることを戒めた論理階型論の成果を高く評価しながらも、それが生あるもののコミュニケーションをより豊かに理解することには繋がらないと指摘した (Bateson 1955→1972=2000: 276)。むしろ抽象性の次元を複雑高度に操作し、そのもつれやねじれを意図的に演出して笑いやユーモアを生み出す人間コミュニケーションの驚くべき可能性にこそ注意を払うべきであると考えた。<sup>(10)</sup>

ベイトソンのフレーム概念は、例えば真面目な会話の中に自在に冗談を織り込みながら会話を楽しむことのできる人間のメタ・コミュニケーション能力に注目するものである。メタ・コミュニケーションとはやり取りされる発話のうち、どれが「真面目」でどれが「冗談」の発話であるかという「コンテクスト」の決定に関わるやり取りを指す概念である (同 270)。このとき、さながら絵画の額縁が背景の壁から絵の内容を区別して括り取り、絵に注目するよう要求すると同じように、真面目な発話から「冗談」の発話を区別して括り取るよう要求するサインの受け渡しが行われるメタ・コミュニケーションの側面がフレームングと呼ばれたのだ (同 269)。

ここで注目すべきは、第一に、絵画の額縁という誰でも知っている単純なところから説き起こし、人間のコミュニケーションの奥深い秘密に少しずつにじり寄っていくとするベイトソンの思考の道筋が、難解な問題を可能な限りシンプルで分かりやすい言葉で解こうとした彼の思想をよく示すものであり、同時にフレーム分析を行うものがすべからず見習うべき美德であると思われることだ。「フレーム」とは、まず難解な理論であるといふよりも、単純なメタファーから出発して対象への理解を深めていくという観察方法上のシンプルな戦略を指す言葉として生まれたのだ。

ウィリアム・ギャムソンらが指摘するように英語の frame には「絵画の額縁」(frame as in picture frame) という意味のほか「建物の骨組み」(frame as in the frame of a building) という意味もある (Gamson et al. 1992: 385)。フレーム分析においては双方の意味合いが混在して用いられることもしばしばある。それゆえ自分がいかなるメタファーを利用することが有益なのかを正確に見極めておくことは是非とも必要である。

容易に推察できるように、「絵画の額縁」メタファーを用いる方法は、注目する対象とそれ以外を境界づけるもの、ないしは視界に課せられる制限を明らかにしようとするのに対し、「建物の骨組み」メタファーを用いる方法は、表立って目に付かない潜在的な構造を明らかにしようとするものである (同 385)。

第二に、ペイトソンにとってフレームという概念があくまでも暫定的なアイデアに過ぎなかったという事実である。彼にとって大事なことは、本研究の観点からすれば、「コミュニケーションはいかにして可能か？」という問いを突き詰めてみることであったといえる。<sup>(11)</sup>したがってある時にはフレームという概念で狙っていた標的を、別の文脈では論理階型と呼んだり、コンテクストと呼んだりしている。またそれらコミュニケーション論的分析的知見を総括するにあたっては、「差異」という概念に大きな役割を与え、壮大な精神の生態学への展望を示してみせた。

社会学者アーヴィング・ゴフマンは「コミュニケーション」という概念そのものに懐疑的であったといわれているが (Winkin 1988=1999: 143)、彼の一連の著作も本研究の観点からすれば、常に「コミュニケーションはいかにして可能か？」という問いと深く関わり続けていた。理論的にみてもっとも重要なことは、*Frame Analysis* においてゴフマンが、ペイトソンのなフレーム論の成果を、アルフレッド・シュッツによって社会学に持ち込まれたリアリティ (reality) の理論によって解釈して意味付けたことである。まさにフレーム概念とリアリティ概念の運命的な出会いがゴフマンの手によって実現したのであり、ゴフマンはこの二つの概念の出会いとくに社

会学の新たな可能性の領野を切り拓いていったのだといえる。

マス・コミュニケーション論や政治コミュニケーション論であれ、ジャーナリズム論であれ、彼らの議論の根底にある「コミュニケーションはいかにして可能か？」という問いは是非共有しておくべきであろう。そのうえでフレームという概念があくまでもこの大きな問いに回答するための道具に過ぎないという事実から出発しなければならぬ。つまりコミュニケーションが可能なのは、人々がフレームを共有するメタ・コミュニケーション遂行能力を有するからという解が示されるわけだ。

だが、当然のことではあるが、「コミュニケーションはいかにして可能か？」という大きな問いに対する解は「フレーム」以外にも無数にあり得ることに注意しなければならない。「フレーム」はあくまでもひとつの解に過ぎない。

この点についてはできるだけ自由かつ柔軟な発想で考え始めることが必要であろう。そのためにもわれわれはベイトソンの洗礼<sup>(12)</sup>を受けることが望ましい。例えば彼は最初にフレームの概念を提起した「遊びと空想の理論」を発表したのとはほぼ同じ時期に、「輪郭はなぜあるのか」というユニークな文章の中で次のようなことを書いている。

娘…パパ、輪郭はどうしてあるの？

父…輪郭？ 輪郭ってあるのかね。どんなものに輪郭があるんだ？

娘…全部よ。絵を描くとき、どんなものでも輪郭を描くでしょう？ それ、なぜなのかなって……。

父…羊の群れはどうだ？ 一頭の羊じゃなくて群れ全体。それにも輪郭があるか？

「会話」はどうだ？

娘…もう！ 会話の形なんて絵に描けないでしょ？」「もの」よ、あたしの言ってるのは。

(Bateson 1972 = 2000: 70)

「輪郭はどうしてあるの？」という恐ろしい質問に対して、「どんなものに輪郭があるんだ？」ということでもない逆質問が返される。珍妙でちぐはぐな娘と父の会話の形を取りながら、まさに想像を絶する哲学問答が交わされているが、一体ここで何が問われているのであろうか？

このやり取りから読み取るべき基本的含意は、輪郭が、「もの、それ自体」にあるわけではないということであろう。そうではなく、われわれの知覚が対象を「リアリティ」として構成する際にはいつも「輪郭」が象られるということだ。否、われわれが何かを「リアル」に感じるためにはまず「輪郭」が獲得される必要があるということでもある。「輪郭」は「リアリティ」の知覚的構成の前提条件といってよい。

眼前のコップや本という物質には絶対的な「輪郭」があるように思えるが、それは誤解で、フッサールが述べたようにあくまでも視覚的に獲得できる「輪郭」は、任意の「射映」として切り取られたものでしかない(Husserl 1913=1979: 178)。少し角度を変えるだけで「射映」として切り取られる眼前のコップの「輪郭」が変化することは誰にでも分かることだ。

ペイトソンの発想が間違なのは、これをあらゆる対象に応用しようとしていることだ。彼が指摘するとおり、時間や空間には「区切り」があり、会話にも、歴史にも「区切り」がある。物事には重要な「区別」があり、人間や動物の群れにも「境界」がある。これら「区別」「区切り」「境界」「輪郭」はあるものを他から際立たせる「差異」のありかを知らせるはたらきを表現する概念群であり、「リアリティ」の構成原理として研究する必要がある主題である。つまり「意味」問題は「差異」問題<sup>(13)</sup>として考える必要があるわけだ。

リアリティの構成という表現は研究者のコミュニティにおいて常套句として定着してきたためその初心が捉え難い部分もあるが、本研究ではこの表現を次のように定義しておく。つまり、「リアリティ」の構成とは、差異が意味を生成することである。そしてある構成された「リアリティ」が人々に共有され、自明視され、制度化され、社会的世界の中に自らの「意味」を具現化し、客観化していくプロセスを「リアリティ」の構築と表現する。双方をもとに表現したい場合には、「リアリティ」の構成・構築と表記する。

#### 第4節 テキスト密着型のジャーナリズム研究に向けて

##### 1 疑う方法としての「テキスト」

さて、以上メデア・フレーム論を換骨奪胎し、「リアリティ」論として再構成された理論的視角から、今後ジャーナリズムと社会的意味に関する事例研究を本格的に進めていく必要がある。そのために、ここでは最後にいくつかの点に言及しておきたい。

ひとつは、事例研究を実際に進めていくにあたっては、メデア・テキストを丁寧に読む、テキスト密着型のジャーナリズム論であることを重視したい。もちろん、テキストを丁寧に「読む」とは一体どういうことなのかは厳密に、理論的に考えようとすれば、これは大問題である。

テキストという概念についてもフレームと同様の考察が必要であろう。今日メデア・スタディーズの多くの教科書にはテキスト分析の方法が分かりやすく示されており、マニュアル化が大いに進んでいる。しかしテキストという言葉からそのまま特定の決まった分析方法を連想するという状況はおそろしく有害であるように思える。なぜならば、「テキスト」という概念もまた「リアリティ」概念と同様に本来的には疑うための方法を意味す

るものだからだ。テキストと正面から向き合う目的は、一般的には「常識」や権威的解釈を疑うために「常識」の網の目から抜け落ち零れている小さな「差異」をテキストの中に見出すためである。それは文学研究のためであろうが、ジャーナリズム論のためであろうが基本的には変わらない。自らの思考を支配している不可視の前提を相対化するためにこそ「テキスト」に向き合うというのに、その方法がマニュアル化されるとは一体どういうことだろうか？

結局のところ、フレーム分析といおうが、テキスト分析といおうが、人間の生きる社会的世界の底なしの意味の可能性、多義性と直面することの根源的な恐怖感が研究者の思考にブレーキをかけているのではないだろうか。無限の意味の可能性と直面し当惑するがゆえに、複雑性を縮減する行為を正当化するための色々な理屈を持ち出して、一体何から考え始めればよいのか途方にくれるという状況から安全に救出してくれる方をわれわれはいつも求めており、その方便によって常に自ら欺かれているに過ぎないのだ。

フッサールの現象学が目指したのは、結局のところ、ものを考えようとする人間が自らを欺かないように考えを深めていくにはどのような道筋を辿っていく必要があるのかを考え抜くことにほかならなかった。それは彼にとって哲学という言葉が意味することとほぼ同義でもあったともいえる。彼はデカルトの偉業の意味について論じる中で次のような印象深い言葉を残している。

真剣に哲学者になろうとする人は誰でも、「一生に一度は」自分自身へと立ち帰り、自分にとってこれまで正しいと思われて来たすべての学問を転覆させ、それを新たに建て直すよう試みるのでなければならぬ。哲学ないし知恵とは、哲学する者の一人一人に関わる重大事である。それは自分の知恵とならねばならず、普遍的に探求されるものでありな

が自ら獲得した知として、初めからそしてその歩みの一步一步において、自らの絶対的な洞察に基づいて責任を持つような知、とやらねばならない。このような目標に向かって生きる決心によつてのみ、私は哲学者となるのだが、もしこのような決心をしたなら、それによつて私は、まったくの無知から始める道を選んだことになる。ここでは明らかに、真正な知に導いてくれる前進の方法をどうしたら見出すことができるか、について考えることが第一である。したがって、デカルトの行った省察は、デカルトという哲学者の単に個人的な事柄を指摘したのではなく、ましてや、ただ印象深い文学的形態をもって最初の哲学的基礎付けの叙述を指摘したものでもない。それはむしろ、哲学を始める者それぞれに必要な省察の原型を表しており、そこからのみ哲学は根源的に誕生することができるのだ (Husserl 1977=2001: 19)。

大事なことはこのすべての学問を転覆させようとする途方もない試みを、たとえささやかながらではあっても自分の研究分野で試みる覚悟を決めることだ。そうすれば、「テキスト」という概念も同じように「疑う」ための融通無碍な「方法」であることが見えてくるはずだ。

## 2 テキストと「濃密な記述」

本研究はメデア・フレイム論を換骨奪胎してリアリティ論として再構成する試みである。本稿で触れることはできなかつたが、この方針に沿って研究を進めていくにあたっては、テキスト概念のほかにも「表象」、「言説」という人文学系の思想・概念から多くを学ばなければならない。つまり、マス・コミュニケーション論、政治コミュニケーション論という社会科学の領域において発展してきた研究を批判的に再構成する作業を、人文科学の手を借りながら遂行しようとしている。この道筋を辿る者は誰であれ、学問的方法論における根本的な断絶、容易に解消しきれない学問観の相克の問題に直面しなければならない。

特にテキストを読むという考え方に示される人文学的姿勢を大胆に取り込む場合、社会科学が要請する「観察の信頼性」という問題は頭の痛い厄介な問題として残り続ける。最後にこの点に関する本研究の立場を手短かに述べて結びとしたい。

本研究は従来の内容分析が絶対視してきた「観察の信頼性」という学問的価値を必ずしも第一義的なものとはしない。誰がやっても同じように読めること、つまり読解の「再現可能性」を「観察の信頼性」を担保する重要な手段と考える「内容分析」の立場が、本研究の想定するジャーナリズム研究にとって必ずしも有益なものとはみなさない。

ここで直面している問題に究極の解答を出すことは本研究の能力と守備範囲を大きく超えることになるが、敢えていえば、問われているのは科学的観察に基づく説明／記述のリアリテイの強度の問題であろう。「再現可能性」を担保することによって説明／記述のリアリテイの強度を確保することは確かにひとつの有力な方法ではあるが、オールマイティではあり得ない。対象の意味構成が複雑になればなるほど「再現可能性」を担保することは調査手続きにおいて事実上不可能なものとなっていく。その結果、内容分析は社説記事を「賛成」「反対」「中立」に分類するといった作業に自己限定を行う(Merton 1949=1961: 409)。こうした分析を無意味であるとはいわないが、かつてマートンが指摘したように「観察の信頼性」を優先するあまり研究を始める動機となつたはずの「理論的重要性」が放棄されてしまう(同前)という本末転倒の事態は回避したい。したがって内容分析が常にこのレベルの単純さしか対象にできないというのであれば、「社会的意味」の複雑な構成について考察を加えようとするジャーナリズム研究は、異なるアプローチを探るしかないだろう。

事件や出来事の「社会的意味」が定義される過程を「リアリテイの構成・構築」の過程として分析するジャーナリズム研究にとっては、クリフォード・ギアーツのいう「濃密な記述(thick description)」(Geertz 1973=1987)



が目標とされるべきであると考ええる。つまりジャーナリストが事件や出来事に対する社会的意味を構築していくその文脈を丁寧に多層的に描いていくことを目指すべきであり、リアリティの強度を高める記述の豊かさに学問的価値を見出したいと考えている。

無論「観察の信頼性」を第一義としないという選択は、不正確な資料の読み方や論理の飛躍を許容するものではない。また曖昧な文学的比喻を弄んで何かを読み解いた気になるという緊張感に欠けた研究に安住するための方便であつてもならない。記述の濃密さを学問的価値として選択する以上、意を尽くさない説明や表現の乏しさは批判の対象となるであろうし、「濃密な記述」という質的方法を選択した場合に「観察の信頼性」の問題がなくなるわけではない点は留意しておく必要がある<sup>15)</sup>。

ジャーナリズム論が「濃密な記述」という方法を選択することのメリットは、既存のニュース生産の社会学の研究成果に照らし合わせる時、より鮮明なものとなるだろう。吉本隆明の言語論やアルフレッド・シュッツの現象学的社会学の成果に依拠しながら『言語としてのニュー・ジャーナリズム』、『ニュース報道の言語論』などジャーナリズム論の新しい可能性を切り拓いた玉木明は、ジャーナリズム論の課題が経験的ジャーナリズムと社会学のジャーナリズム論の乖離をいかに埋めることができるかという点にあると指摘している(玉木一九九二・二七五―六)。ここである経験的ジャーナリズム論とは、現場経験を持つジャーナリストが自らの経験を反省的に語るもののことをいう。他方で社会学のジャーナリズム論とは構造的な問題に注目し、ジャーナリストの経験にほとんど考慮を払わないタイプの研究のことを指している。玉木はジャーナリストの個人的経験のみに拘泥する議論も、現場の経験に一切配慮しない研究も十分とはいえないと指摘している(同二七五―六)。

テキスト密着型のジャーナリズム論は、メディア・テキストと事件や出来事の「社会的意味」を関連付けるにあたって様々なテキスト生産過程の力学を参照することができる。ジャーナリストの個人的な思想、情報源から

受ける影響、ニュース取材の職業的慣行、組織が有する資源、媒体の特性、社会的に広く共有されている規範や価値意識などテクストの社会的意味に影響を及ぼす要因は多数存在するし、これらをどのように分類するのがもっとも適切なのかをめぐっても多様なアイデアがこれまでの送り手研究、ニュース生産の社会学、メディア言説の研究などで蓄積されてきた (Hall 1982, Davis 1985, Shoemaker & Reese 1996)。

すなわち、テクストを「読み」ながら事件や出来事の「社会的意味」がいかに構成されたのかを分析する作業は、こうしたメディア・テクストの生産に影響を与える生産過程の力学を然るべき文脈に多層的に割り当てて記述していくまさに「濃密な記述」の実践にほかならない。テクストの生産に関わる多様な要素をどのような文脈に割り当てべきかを判断し細やかに記述していく的確な距離感が求められるのであり、その記述のための社会的文法を研究者ひとりひとりが観察対象の固有の問題の形と真剣に対話しながら模索していくことが求められるのである。

(1) しかし実際にはこの限定的な定義を厳密に突き詰めようとした途端に、研究者の間の重大な見解の相違が露呈してしまふ。バーガーとルックマンは、*reality* という概念を「われわれ自身の意志から独立した一つの存在を持つと認められる現象(われわれは〈それらを勝手に抹消してしまふ〉ことはできない)に属する一つの特性」として定義している。そのうえで「これらの現象が *real* であり、それらが特殊な性格をそなえたものである」ということの確証として「知識」を定義している (Berger & Luckmann 1966=1977: 1)。この定義はシュッツの現象学的社会学の延長線上に彼らの議論を捉えようとする人間にとっては決して分かりやすいものではなく、むしろ当惑を覚えるものである。

なぜなら、この説明において「リアリティ」は「知識」と明確に分離、区別された概念である。ところが、シュッツはウイリアム・ジェームズの心理学的なリアリティ論を批判的に、現象学的に読み換える試みにおいて、フッサー

ルの議論に依拠しながら「リアリティを構成しているのは諸々の対象の存在論的な構造ではなくて、われわれの諸経験のもつ意味」であると明確に述べている (Schutz 1962=1985: 38)。シュッツの説明は「リアリティ」概念を対象そのものの性質ではなく、対象についてわれわれが経験する「意味」の側に明確に力点を置いている。これは決して軽く扱ってよい相違点ではない。

では、なぜこのような相違が生まれるのかというと、バーガーらが「リアリティ」概念を社会学化していることに理由がある。端的にいうと、バーガーらの「リアリティ」論はシュッツの現象学的社会学をデュルケム社会学と折衷するところに生まれている。彼らはデュルケムというところの「社会」の「独特の現実性」(‘reality sui generis’)の重要な特質が客観的事実性としてあると同時に、主観の意味としてもあるという点に見出した (Berger & Luckmann 1966=2003: 18)。つまり現象学が提起した「リアリティ」論を「意味」問題として解くという理論図式に非常に大きな修正が加えられているのである。

バーガーらの著書の訳者である山口節郎はラディカルな(現実構成主義者)の側からみると、バーガーらがあまりにもオーソドックスな社会学に妥協しすぎているとみられるはずだと指摘しているが(山口二〇〇三:三三二〇)、理論的にみればこのもつとも中心的概念である「リアリティ」の定義において既に「妥協」が宣言されている。シュッツが現象学の成果をもって対峙したウェーバー社会学の「意味」を重視する立場を「主観主義的社会学」として要約し、これをデュルケム的な社会の外在性、事実性を強調する「客観主義的社会学」と弁証法的に把握するという理論的操作が行われているのである。

本研究は、「現象学的社会学」としてひと括りにされがちなシュッツとバーガー&ルックマンの間にみられる以上のような重要な差異の持つ含意を踏まえながら、「リアリティ」論はあくまでも「意味」問題として考えることを基本としつつも、この考え方によって(主観)と(客観)の問題系が完全に解消されるわけではないという立場に立つ。つまり、(主観)と(客観)という永遠に解かれることのない二つの問題系の間にある論理的断崖に現在もつとも重要な橋をかけているのが「意味」概念であると理解する。

(2) この点についてはフッサールが現象学の基本的問題意識として語った次のような点を正確に、つまり現象学以前の「観念論」と区別して理解しておく必要がある。

「超越論的現象学的観念論が、あの種の観念論、つまり実在論によってもつばら排斥されるべきその敵対者と目されて攻撃されるところのあの種の観念論とは、根本本質的に異なったものであるというその差異を、表立って明確に示しておくことは必要であろう。何よりもまず、次の差異が重要である。すなわち、現象学的観念論は、実在的世界（そしてまずもつては自然の）現実的存在などを、否定したりするものではない。あたかも現象学的観念論の説くところでは、実在的世界は一つの仮象であり、自然的思考や実証科学的思考は、たとえそれと気付かれずとも、この仮象に陥っているということにでもなるかのごとく、実在的世界の現実的存在を、否定したりするものではない。現象学的観念論の唯一の課題と作業は、この世界の意味を解明することであり、正確に言えば、この世界が万人にとつて現実的に存在するものとして妥当しかつ現実的な権利をもつて妥当しているゆえんの、ほかならぬその意味を、解明することにあるのである」（Husserl 1913=1979: 33）。

(3) Construction という言葉の訳語が「構成」か「構築」かは頭の痛い問題であるが、脚注1で触れたように彼らの「リアリティ」論は社会的なニュアンスを強く帯びており、ウェーバー的な意味の世界からデュルケーム的な世界がいかにか生まれるか、つまり客観的事実性、モノの世界がいかにか生まれてくるかを主題にしている。こうした問題意識を表現するには「構築」のほうがふさわしいと思われる。なぜなら巨大な建築物をつくる語感が「構築」にはあるからだ。それに対して「リアリティ」の構成という場合、文章の構成を考える、本の構成を考えるという具合に「意味」を表現することに関わるニュアンスが含まれている。それゆえ本研究では「意味」の表現に深く関わる文脈では「構成」を用いて、制度や規範などと深く関わる「意味」の自明性や「強度」の問題に関わる文脈では「構築」を用いることにする。両方を論じたい場合は、構成、構築と表現する。

なおマス・コミュニケーション論やメディア・スタディーズの学説史でいうと、「構築」に関する研究が先に進み、むしろ「構成」の研究のほうが遅れてきた経緯がある。本研究におけるペイトソン論は「構成」の問題について理解を深めることを目指したものといえる。

(4) 例えば彼らは次のように語っている。「リアリティの構成という問題は伝統的に哲学の中心問題であったという理由から、この理解には一定の哲学的な意味合いが含まれている。しかし、現代哲学においては、この問題は、それにとともなうすべての疑問点とともに、軽視されてしまうという根強い傾向がみられてきた。それゆえ、ことによると、

社会学者が——おそらくは彼にとつても驚きであろうが——専門の哲学者がもはや考えることに興味を失っている哲学的問題の後継者になる、ということも考えられるのである。」(Berger & Luckmann 1966=2003: 387)。またこの指摘の直後に「社会学的に方向づけられた思考が哲学的人間学のためになしうる寄与」という表現を用いて自分たちの議論の可能性について言及している。

(5) ヴィヴィアン・バーは、次の七点のうち、ひとつもしくはそれ以上に該当する研究を構築主義と定義している(Burr 1995=1997)。すなわち、①反本質主義、②反実在論、③知識の歴史のおよび文化的な特殊性、④思考の前提条件としての言語、⑤社会的行為の一形態としての言語、⑥相互作用と社会的慣行への注目、⑦過程への注目、以上の七点である。この基準でいえば今日マス・コミュニケーション論、メディア社会学は全体として大幅に「構築主義的」な傾向を強めてきていると思われる。

(6) 構築主義は人文・社会科学を横断して大きな影響力を獲得してきたが、ジャーナリズム論の領域においては近年では山口仁が「社会問題の社会学」の研究を足がかりに、構築主義がジャーナリズム論にいかなる理論的貢献をなし得るかという重要な研究を行っている。本研究においてはこうした先行研究の成果を前提とし問題意識を共有しつつも、構築主義という知的ムーブメントの重要性に力点を置くという山口のアプローチとは異なる本研究の意図を明確に表現するために「リアリティ」の社会学の研究と呼んでおこう。もちろん大きな括りにおいて本研究は自らの立場を構築主義や社会構成主義と呼ぶことを躊躇わないし、そのように位置付けられることも否定しない。

(7) メディア・スタディーズに関する文献は急激な勢いで増加しつつあるが、初期の重要文献としては例えば吉見編(二〇〇〇)がある。

(8) ベイトソンがフレーム概念を用いて重要な考察を行った「遊びと空想の理論」が書かれたのは一九五五年のことであった。Bateson (1955) を参照のこと。

(9) 論理階型概念はバートランド・ラッセルによってクラスとメンバーの混同がもたらす問題点を論じるために利用された。例えば、ハト、クラス、スズメという名前は鳥類というクラスに属するメンバーを表している。この場合クラスはそれ自身のメンバーにはなれない。したがって、ハト、クラス、スズメという呼び名と、トリという表現を同一の論理の地平で扱うことは論理階型の混同とみなされる。

この説明に接すると「何を当たり前のことを」と思われるであろうが、科学の中にはしばしばこの論理階型の混同、すなわち〈抽象性の次元の取り違え〉が生じ議論の混乱を招いているとバイトソンはいう (Bateson 1965→1972 = 2000: 383)。バイトソンはこの概念を極めて高く評価し、論理学を超えた広範な知の領域の中に論理階型的な問題、つまり〈抽象性の次元の取り違え〉の問題が数多潜むことに眼を向けていった。彼のフレイム概念は、この〈抽象性の次元の取り違え〉問題をコミュニケーション論の文脈において観察しようとする際に浮かび上がってきたものだったのである。

(10) バイトソンは、人間や動物のコミュニケーションの中にどのようにして論理階型の取り違えが生じるのかを様々な例を挙げて説明しようとした。例えば彼は動物園のサル山を観察しながら、サルの子供が噛み付くふりをしながらじゃれ合っている「遊び」の場面に注目した (Bateson 1965→1972 = 2000: 262-2)。「噛み付き」という「戦い」の際の動作 (＝ムード・サイン) を模してじゃれ合う子ザルたちの中には、互いが提示する「噛み付き」の動作が「戦い」ではなく「遊び」のためのものであることについてのメッセージがやり取りされてきた (同 272-3)。

このように「戦い」や「遊び」などそれぞれのコンテクストの内側でやり取りされるメッセージではなく、「戦い」か「遊び」かというコンテクストそれ自体の設定に関わるメッセージをメタ・メッセージと呼び、このメタ・メッセージが交わされるコミュニケーションを、メタ・コミュニケーションという (同 270)。論理階型の取り違えは、このメタ・コミュニケーションの失敗として引き起こされる。このサルの「遊び」の例でいえば、「戦い」を模して「噛み付くふり」に止めるつもりがうっかり本当に噛み付いてしまい、「遊び」が本当の「戦い」に発展するケースなどが考えられる。

(11) 「コミュニケーションはいかにして可能か？」という表現は、社会学者がしばしば用いる「社会はいかにして可能か？」になぞらえたものであり、この問題意識には他者と意味を共有することの困難さへの認識が前提となっている。バイトソンやゴフマンが異文化圏のフィールドワークや精神病者という「他者性」の明確な存在を研究対象としてきたがゆえに、コミュニケーションの可能性を自明視しない考え方が発想の基本にあるようにみえる。なおこの点については柄谷行人の「他者性」の議論に大きな示唆を得ている。柄谷は文化人類学と精神分析学が「他者性」との強烈な出会いを経験するフィールドであるがゆえに、そこから生まれてくる理論や思想に専門領域を超えた大きな可

能性が認められることを指摘している(柄谷一九八九)。

(12) ベイトソンにとつて「コミュニケーション研究」とは、既成学問の窮屈な制約から逃れて自由に思考実験を繰り返すための便利な実験部屋の如きものであった。もちろんこれとても彼の無尽蔵な創造的思考を収める器としてはあまりにも小さく、ただの仮住まいの宿でしかなかったのだが。いずれにせよ、彼が試行錯誤を重ねながら歩いた道のりは、コミュニケーション研究にとつて小さなダイヤの原石を拾い集めるような楽しさがある。

(13) 「差異」はベイトソンのコミュニケーション論を支えるもつとも重要な概念であり、この点について彼は繰り返し様々な表現を用いている。例えば次のようなシンプルな問いかけは、ベイトソンの自在さと明晰さが如何なく示されていて印象深い。

「差異とは、『違い』とは、一体何なのでしょう。なんとも奇妙で、捉えがたい概念であります。『もの』でもなければ、『出来事』でもない。たとえばこの紙と、この演台の木との間には違いがあります。色の違い、手触りの違い、形の違い、さまざまの違いがある。しかしそれらの違いはどこにあるのかと考え出すと、厄介なことになります。紙と木の違いは、紙の中にもなければ、木の中にもありません。といって、紙と木の間の空間にあるのでもない。両者の間の時間の中にあるのでもありません。(この、違いが時をへだてて生まれることを、われわれは「変化」と読んでいます。) 差異とは、具象的な何かではありません。抽象的なものであります。」(Ratson 1972=2000: 600-01)

(14) この用語は通常「厚い記述」と訳される。ただギアーツの『文化の読み方／書き方』を翻訳した森泉は、次のように述べて「濃密な記述」という訳語を提案している。ここでは森泉の提案に賛同し、「厚い記述」という訳語を使用することを避けた。

……「厚さ」というと「かさ」や「分量」を連想させがちで、ギアーツがこの語に含意させている……民族誌学的記述のもつ意味論的な構造的性、成層性、質的なものからずれるきらいがあるので、むしろ「濃密な」という訳語を提案したい(森泉一九九六・二六四)。

(15) 学問にはそれぞれ固有の「観察の信頼性」問題の形があるように思える。自然科学と文学はまったく異なる原則に従っているようにも思えるが、認識の妥当性を究極のレベルで保証するものは一体何なのかという問いは、どんな学問においても考え抜かれる必要がある。フッサールの現象学はこの点を集中的に考えようとしたものであったこと

は間違いない。本論で言及しているギアーツが専門とする文化人類学においてはこの「観察の信頼性」の問題が、観察対象者との信頼関係の問題とセットで考えられており大変興味深い。

参考文献

- 大石裕（一九九八）『政治コミュニケーション—理論と分析』勁草書房。  
（二〇〇五）『ジャーナリズムとメディア言説』勁草書房。  
鳥谷昌幸（二〇一四）「メディア・フレームとメディアの権力—The Whole World is Watchingを読む」『メディア・コミュニケーション』No64、五—二三頁。  
（二〇一六）「メディア・フレーム論の批判的再検討—『ジャーナリズムと社会的意味』研究のための一考察」『法学研究』八九巻五号、一—五〇頁。  
柄谷行人（一九八九）『意味という病』講談社文芸文庫。  
（一九九〇）『マルクスその可能性の中心』講談社学術文庫（初出は『群像』一九七四年三月号〜八月号）。  
（一九九〇）『畏怖する人間』講談社文芸文庫。  
竹沢泰子編（二〇〇九）『人種の表象と社会的リアリティ』岩波書店。  
玉木明（一九九二）『言語としてのニュー・ジャーナリズム』学藝書林。  
森泉弘次（一九九六）「記者あとがき」、クリフォード・ギアーツ『文化の読み方／書き方』岩波書店、二六—一七七頁。  
山口仁（二〇一三）『ジャーナリズムに関する構築主義的アプローチ—マス・メディアと二重の現実の構築・構成』（慶應義塾大学法学研究科・平成二四年度博士論文）。  
山口節郎（二〇〇三）「新版記者あとがき」、ピーター・バーガー、トーマス・ルックマン『現実の社会的構成—知識社会学論考』新曜社、三—一五—二二頁。  
吉見俊哉編（二〇〇〇）『メディア・スタディーズ』せりか書房。  
Adoni, H. & Mane, S. (1984), "Media and the social construction of reality toward an integration of theory and research." *Communication Research*, 11(3), 323-340.



- Bateson, G. (1955). "A theory of play and fantasy." *Psychiatric Research Reports*, 2(39), 39-51.
- (1972). *Steps to an Ecology of Mind*. 佐藤良明訳『精神の生態学』新思索社、二〇〇〇年。
- (1979). *Mind and Nature*. 佐藤良明訳『改定版 精神と自然 生きた世界の認識論』新思索社、二〇〇六年。
- Bateson, G. & Ruesch, J. (1951). *Communication: The Social Matrix of Psychiatry*. 佐藤悦子、R・ホスバーク訳『精神のロマンティック』新思索社、一九九五年。
- Berger, P. & Luckmann, T. (1966). *The Social Construction of Reality: A Treatise in the Sociology of Knowledge*. New York: Double and Company. 山口節郎訳『現実の社会的構成—知識社会学論考』新曜社、二〇〇三年(初版一九七七年)。
- Berger, P. L. (1973). *The Social Reality of Religion*. Harmondsworth: Penguin Books.
- Burr, V. (1995). *An Introduction to Social Constructionism*. London: Routledge. 田中一彦訳『社会的構築主義への招待—言説分析とは何か』川島書店、一九九七年。
- Davis, H. H. (1985). "Discourse and media influence." Van Dijk, T. A. (eds), *Discourse and Communication*, 44-59.
- Ganson, W. A. (1985). "Goffman's legacy to political sociology." *Theory and Society*, 14(5), 605-622.
- (1988). "The 1987 distinguished lecture: A Constructionist approach to mass media and public opinion." *Symbolic Interaction*, 11(2), 61-74.
- (1989). "Media discourse and public opinion on nuclear power: A constructionist approach." *American Journal of Sociology*, 1-37.
- Ganson, W. A., Croteau, D., Hoynes, W., & Sasson, T. (1992). "Media images and the social construction of reality." *Annual Review of Sociology*, 373-393.
- Geertz, C. (1973). *The Interpretation of Cultures : Selected Essays*. 吉田禎吾ほか訳『文化の解釈学』岩波書店、一九八七年。
- Gitlin, T. (1980). *The Whole World is Watching: Mass Media in the Making & Unmaking of the New Left*. University of California Press.

- Hall, S. (1982). "The rediscovery of ideology: Return of the repressed in media studies." *Cultural Theory and Popular Culture: A Reader*, 111-141.
- Husserl, E. (1913). *Ideen I*. 渡辺二郎訳『イデーン 純粹現象学と現象学的哲学のための諸構想 I』みすず書房、一九七九年。
- Husserl, E. (1977). *Cathansische Meditationen*. 浜渦辰二訳『デカルト的省察』岩波文庫、二〇〇一年。
- Merton, R. K. (1949). *Social Theory and Social Structure*. Free Press, revised 1957. 森東吾・森好夫・金沢実・中島竜太郎訳『社会学理論と社会構造』みすず書房、一九六一年。
- Schutz, A. (1932, 1960). *Der sinnhafte Aufbau der sozialen Welt: Eine Einleitung in die verstehende Soziologie*. Wien: Springer-Verl (1974). Frankfurt a. M. 佐藤嘉一訳『社会的世界の意味構成—ヴェーバー社会学の現象学的分析』木鐸社、一九八二年。
- Schutz, A. (1962). *Collected Papers I: The Problem of Social Reality*, edited and introduced by Natanson, M. (Phaenomenologica Vol.11). The Hague: Martinus Nijhoff. 渡部光・那須壽・西原和久訳『アルフレッド・シュッツ著作集第2巻 社会的現実の問題【II】』マルジュ社、一九八五年。
- Shoemaker, P. J. & Reese, S. D. (1996). *Mediating the Message*. White Plains, NY: Longman.
- Tuchman, G. (1978). *Making News: A Study in the Construction of Reality*. New York. 鶴木真・櫻内篤子訳『ニュース社会学』三嶺書房、一九九一年。
- Winkin, Y. (1988). "Erving Goffman: Portrait du sociologue en jeune home." *Les Moments et Leurs Hommes*. Paris: Seuil. Minuit. 石黒毅訳『アーヴィン・ゴッフマン』せりか書房、一九九九年。